

正月元旦の新聞

毎年のことだが、元旦の新聞に注目している。どさりと自宅に配達される新聞だけでなく、他紙も買い求めるようにしている。元旦午後、コンビニに買いに行ったが、売り切れのところが多かった。自転車で数軒ほど回って、やっと手に入れることができた。

写真は自宅にある新聞、買い求めた新聞 6 紙。年の初めに、1 面にどのような記事が掲載されるか興味深い。社説にも、各紙の特色と時代状況があらわれている。社説の見出しを順に紹介しよう。



朝日新聞—政治改革 30年の先に 権力のありかを問う直す

読売新聞—米中対立の試練に立ち向かえ 新時代に適した財政・社会保障に

毎日新聞—一次の扉へ AI と民主主義 メカニズムの違いを知る

日本経済新聞—不確実性にたじろがず改革進めよ

大阪日日新聞—新年を迎えて 寛容な時代をつくりたい

なお、産経新聞は社説にあたるものが掲載されていなかった。

社説のなかで、大阪日日新聞社説の後半を紹介したい。この新聞を大阪に来て知り、図書館で定期的にチェックしている。大阪のことを考えるうえで参考になる。

「少子高齢化と人口減少にさらされる日本。この試練に立ち向かい、持続可能な社会をつくっていくには、私たちは「痛み」も覚悟しなければいけない。だからこそ、欠かせないのは、異なる意見の持ち主をおもんばかり、耳を澄ますこと。接点を探り、取り入れられるものを採用しながら、幅広い合意を得ようと努力することだ。

そして、理解を促すために、状況を詳細かつ丁寧に説明する為政者の言葉。「解」が見だしにくい未知の課題に対処するのだから、政策を不断に検証、見直す謙虚な心構えも持たなければいけないだろう。

同時に、発想を変えてみたい。20年の東京五輪・パラリンピック、25年の大阪万博…と、この国は半世紀前と同じ道を歩みだした。だが、予算をつぎ込み、次々と新しいものを建設、開発する時代はとっくに終焉している。ならば技術力を磨き、古いものを再生していく試みで新たな軌跡を描けないか。

分断ではなく統合の思考、さまざまな立場の声をくみ取る姿勢、いまほど、多様性を受け入れる「寛容さ」が求められるときはない。居心地の良さに安住するばかりではなく、ときには離れてみることも必要だ。きしむ社会、痛んだ民主主義を修復するのは、私たち一人一人である。」

(2019年1月2日)